「目に見える障害の人が羨ましい」
ー精神障害を持つ人のインタビュー・ナラティブに見る当事者同士の相互認識と規範意識ー

周氷竹（大阪大学大学院）

1. はじめに

本稿は精神障害者の語りに現れる「ポジショニング（立ち位置）」（Bamberg 1997）を分析することにより，当事者同士の相互認識の一端を明らかにし，また語りに表出される障害（者）に関する規範意識を検討することを目的とする.この目的を達成するため，以下の 3 つのリサーチ・クエスチョン（以下，RQ）を設定する.

RQ① 当事者がどのように自己を位置づけているか.

RQ② 当事者同士の間で，障害を持つほかの当事者にどのような認識を抱くか.

RQ③ 語りの中にどのような障害（者）に関する規範意識が表出されたか.

2. 先行研究

近年の精神障害当事者のナラティブに焦点を当てる研究は内容的に大きく 2 つの種類に分けられる.1 つは，日常生活における困難，葛藤経験，当事者に関する活動への参加経緯などの実情を明かす研究である（川岸他 2002，片岡他 2003）.もう 1 つは当事者のナラティブを，環境と当事者との相互行為により動的に生成されたものとして捉え，主に当事者にとっての「病」の意味変遷を考察した研究となっている（田中 2000，北村 2004）.しかしながら，当事者の語りを対象に，当事者同士の理解構造や語りに内包された規範意識についての微視的な考察は少ない.また，規範意識に関わる障害当事者間の序列化について研究としては，マーフィー（2006）が，健常者の身体を最善のものとしてとらえ，身体を障害の重度や種類によって序列化する，いわゆる障害のヒエラルキーの存在を指摘しており，その評価の基準は，どれだけ標準的な人間の形から離れているかであるとしている.それに対し，精神障害当事者の基準について，早野（2018）は，社会復帰の程度に応じて序列化されると述べている.このことから，体か心かという障害の違いが，当事者間で異なる基準による序列化を産出していることが窺える.

3. 本研究で用いられる分析の概念

ポジショニングは社会構成主義を背景とした，位置づけを示す概念であり，会話参与者によって協働で作成されたストーリーラインの中で，参与者としての自己の立ち位置が客観的にも（間）主観的にも首尾一貫した形で会話の場に置かれるという，談話プロセスの概念の 1 つである（Davies and Harré 1990）.Bamberg（1997, 2004）はポジショニング分析を 3 つのレベルに分けている.すなわち，レベル 1 語りの世界におけるポジショニング，レベル 2 他者との相互行為におけるポジショニング，レベル 3 その場その時の文脈を離れても成立する，社会文化的なポジショニングである.

もう一つの概念であるスモール・ストーリー（Small story）についてイエルガコポロ（2013:24）が，スモール・ストーリーを，現在進行中の出来事，未来や仮定の出来事，語りを据え置くこと，また語るのを否定することなど，「会話の文脈において頻度が高く，目立つナラティブ行動の全域を捉える包括的な用語」であると定義している.スモール・ストーリーは，過去の出来事を時系列に整理された節の連続のような，標準とされてきたナラティブから逸脱しているものを指す（佐藤 2020）.語り手のスモール・ストーリーからアイデンティティの表出が分析できるとされている（Schiffrin 1996）.

4. データの詳細

本稿は，2019 年 11 月から 2022 年 8 月にかけて，精神障害を抱える者 10 人に半構造化インタビューを行い，それら

の語りを分析・考察した研究の一部である.本稿は上記データのうち2022年5月にZoomを通して行われた2者間のインタビュー会話を取り上げる.本例のインタビュイーSZは，一般就労を通じて会社員として働きつつ，あるうつ病の当事者グループでボランティアとして活動している.SZには，うつ病に関する経験を語ってもらったが，インタビューの途中で，SZは自分が杖の利用者であると開示した.筆者とSZのプロファイルは以下表1の通りである.

表1

会話参与者	世代別	性別	職業	言語的背景	精神障害	注
筆者	20代	女性	大学院生	中国語L1話者 日本語L2話者	非当事者	
SZ	30代	女性	会社員	日本語L1話者	うつ病当事者	身体障害当事者

5. データ分析

データ分析の部分で，データ1とデータ2をめぐって，RQ①とRQ②の分析を行う.「6. 考察」ではRQ①とRQ②に対応する分析を踏まえつつ，考察を行う.
データ1に入る前に，SZは当事者グループでボランティアとして公式アカウントの運営に携わりつつも，体験談などを共有する活動に参加しないと語った.データ1はその理由について述べる語りである.

データ1　「当事者の人から見たら　キラキラしたような感じに見えるタイプの方になる」（録音の13:28-14:58）
1. SZ:　あの: オープンチャットとかを でお話したりとかすると んˑˑˑ
2. 筆者:　ん
3. SZ:　私どちらかといえば あの:(.) なんて言えばいいですかね もう結構
4.　ほかに友達とか
5. 筆者:　ん
6. SZ:　あの なんとか 職場の人とかとも一緒にお話したりとか ご飯食べに行ったりとか
7. 筆者:　ん
8. SZ:　いわゆるその(.) キラキラした感じ うつ病の人 当事者の人から見たら
9.　キラキラしたような感じに見えるタイプの方になると思うんですけど
10.　.h なんか それが逆に あの なんだろう 当事者さんからしてみたら やっぱりあんまり@@@
11.　趣味とかも普通にたくさん持ってますし あんまりこう なんか逆に負担かけちゃうかなとか
12. 筆者:　あˑˑなんか，自分は自分の方がなんか今もそんなに当事者っぽいではなくなって だから そ
13.　その1面をちょっと見せたくない 見せたくないというか ちょっと相手になんか =
14. SZ:　= ん そうですね それがまあ もちろん私も本当にもう人混みもあんまり好きじゃないですし
15.　ん えっと 初対面の人は元々人見知りなので嫌いですし あの こうフラッシュバックを起こして苦し.
16.　むこともありますし 色々あるんですけども 傍から 傍からと言えば 当事者から見れば
17.　あの 充実してるじゃんみたいな感じで見られるタイプ…

当事者活動に参加しない理由について，SZはもし自分が参加すれば，当事者団体のメンバーに負担をかけてしまうという仮想のシナリオ（hypothetical scenario，Geprakopoulou 2001）を描くスモール・ストーリーを用い，説明している.1行目で，SZは「と」を伴う条件節を用いて，もし自分がグループのオープンチャットに参加する場合，どういうことが起こりうるかを語り始めている.
このシナリオにおいて，SZは障害を持たない職場の同僚たちと交流する，食事をする，また，多種多様な趣味を持つという具体性を帯びた出来事をあげつつ，レベル1（ストーリーの世界）では，世間一般が抱える，無気力で雰囲気が重苦しいといったうつ病のある人に対するイメージにそぐわない，「キラキラした感じ」（8, 9）な人と自分を位置づけている.一方，SZはグループ活動に参加するほかの当事者を語る時，距離感を有する敬称「当事者さん」（10），また，シナリオの現実味をより聞き手に印象付けようとする，仮想の当事者によるからかい「充実してるじゃん」（17）を用い，同じグループに所属するメンバーに対して，親近感が感じられない自己を表出している.
レベル1では，SZは極力ほかの当事者との異質性を表出している一方，レベル2（相互行為の場）では，グループのメンバーでもない，病気の当事者でもない筆者を前に，当事者というカテゴリーに近づこうとする試みが見られる.自分の異質性を表出している語りで，「あの」（1, 3, 6, 10），「なんて言えばいいですかね」（3），「なんだろう」（10）が観察され，この流暢でない話し方から，SZは部外者の筆者に向けて，当事者グループの一員としてグループ内部のことを話すのに躊躇する様子が窺える.この点について，ストーリーを収束する14-17行目の語りからも裏付けられる.SZは「人混みもあんま

り好きじゃない」（14），「初対面の人は元々人見知りなので嫌い」（15），「フラッシュバックを起こして苦しむこともあります」（15-16）などと列挙することで当事者との異質性の表出を緩和し，活動に参加しない理由は，ほかの当事者に自分のキラキラした様子を見せたくないという点だけではないことを説明して，当事者というカテゴリーに近づこうとしている.

全体の語りを通して，レベル 3（社会文化的な自己意識）の SZ の立ち位置をまとめる.データ 1 では，当事者というカテゴリーに距離を置く自己（当事者をサポートするスタッフとしての自己，「キラキラした」自己）と，カテゴリーに近づこうとする自己（慎重に部外者に向けて内部の事情を話す自己）両方が表出されている.

データ 2 はデータ 1 の続きの語りで，SZ はさらに活動に参加しない理由を追加している.

データ 2　「目に見える障害を持っている人は羨ましい」（録音の 16:24-18:16）

1. SZ:　まあオフラインとかのイベントに行けば もう私杖ついているんで.h あの: あ(.) あの まあ
2.　ん 障害者って(.) ていう言葉はあんまり> 好き(h)じゃない <
3.　[あと　でも 障害抱えてるんだっていうふうに見えるんですけど
4. 筆者:　[はいはい ん
5. SZ:　でも:　えっと これも ん: メンタルあるあるってあんまり言いたくないんですけど
6.　結構やっぱりメンタルを抱えてる人は(.) あの まあ 私も含む私の家族がそうですけど
7.　理解されてない人が 理解されないことが結構多いじゃないですか
8. 筆者:　ん
9. SZ:　ん それで 苦しんでる人が結構多いんですけど
10.　中にはちょっとあの ゆ ん あんまり 歪んだというか
11.　あの 障害 目に見える障害を持っている人は羨ましいとか たまに
12. 筆者:　ん::
13. SZ:　オープン（チャットで）言葉が（　）注意しても 時々出てしまうんですよね
14. 筆者:　ん
15. SZ:　ん だから ん そういう意味でも やっぱり見た目の障害も目に見えて持っているので(.)
16.　ん::みたいな(h)@@@@
17. 筆者:　なるほど そうですね
18. SZ:　だから なんですかね
19.　本当は IM さん（同じく当事者グループで活動するボランティア）みたいに皆さんとちょっとお話して
20. 筆者:　ん
21. SZ:　あの人はこう この人はこう こういう考えなんだとか こういう考えなんだなとかって こう 自分の活動
22.　に活かせるようなことしたいんですけど
23. 筆者:　はい
24. SZ:　やっぱオープンチャットをずっと見てるから 見てるので まあ
25.　こういう考えもあるんだっていうのが分かってるので，実際に会うのがちょっと やっぱ怖いなっていうの
26.　が(h)@

データ 2 では，精神障害を持つ当事者団体のオープンチャットで，「目に見える障害を持っている人は羨ましい」という発言が，結果的に杖の利用者，身体障害の当事者としての SZ を傷つけたことが語られている.

データ 2 のレベル 1（ストーリーの世界）では，発言により恐怖感を感じ，活動に参加しないようにする SZ が表出されている.19-22 行で，SZ はデータ 1 と同じく，「このような発言がない場合，自分もほかのボランティアのように活発に参加者と交流する様子」という仮想のシナリオが展開されている.

しかし，2 つのデータで展開されている仮想のシナリオの内容は異なっている.佐藤（2020:104）は仮想のシナリオには，「反実仮想（実際には実現しなかった事態を実現したものと想定）」と「仮説（未実現の実態が実現した場合の仮定）」があるとしている.本稿のデータ 1 は仮説，すなわち仮想の他者にかける負担であると考えられ，データ 2 は反実仮想，すなわち，もし先述のオープンチャットでの発言がなければすることを望んでいたビジョンである考えられる.

次に，レベル 2（相互行為の場）のポジショニング分析を行う.データ 2 では，SZ は当事者目線（「私も含む私の家族がそうですけど」（6））で，ほかの当事者を理解できる人（「メンタルあるあるってあまり言いたく無いですけど」（5）「理解されてない人が　理解されないことが結構多い」（7），「苦しんでる人が結構多いんですけど」（9））として，理解を得られないが故にもたらされた苦痛を感じる当事者らに共感する姿勢を示している.非当事者の筆者を前に，SZ は部内者として，慎重に，自分を不快させる発言をする精神障害当事者に対する不満を表している.

全体の語りを通して，非当事者の筆者を前に，部内者として，SZ は当事者の「悪口」を控えめに言う自己を表出してい

る.オープンチャットで流された疎外感を与える発言により，当事者団体の活動に距離を置き，無力感，恐怖感が感じられるSZ も表出されている.

6. 考察

上記の分析を踏まえ，RQ①，RQ②，RQ③について考察する.

RQ①についての分析を述べる.SZ は当事者の経験，苦痛を理解する，また世間が精神障害のある人々に対するスティグマが根強く存在するという現状を知る部内者として，慎重に当事者団体内部の事情を語り，精神障害の当事者という立ち位置を維持している.一方，普通に働く「キラキラしたような感じに見える」人として，苦痛がわかってくれない身体障害の当事者として，自分とほかの精神障害当事者との異質性を表出している.全体の語りを通して，こういった複雑な立ち位置の間で徘徊している SZ の姿が示されている.

次に，RQ②と RQ③，すなわち当事者同士の相互認識と規範意識について考察を行う.先行研究で述べられていることも含め，いくつかの序列が観察された.1 つ目は，障害を持たない人と同じ職場で働く SZ は自己を「キラキラしたような感じに見える」人として位置づけ，ほかの当事者との差異化を図り，障害を持たない職場の人に近づこうとする様子が見られる.健常者中心の規範意識が内在化され，語りの産出に至ったのである.これは，先行研究で述べられた，障害を持たない人の状態を最善とする序列化の 1 つであり，また社会復帰の度合いを物差しとする序列化の事例と言える.それと同時に，SZ の語りでは，障害者という言葉の使用に抵抗感を示すことから，健常・障害 2 分法に抵抗する SZ の姿が見られている.2 つ目は，先行研究では見られなかった，身体障害と精神障害の序列化である.「目に見える障害を持っている人が羨ましい」という「声」から，「目に見える」身体障害が目に見えない精神障害に比べて，理解されやすい可視的インペアメントがあるが故に，目に見える・見えないという視覚的な基準に沿ってヒエラルキーが作られ，序列化されていることがわかった.こういった言動は身体障害と精神障害を同時に持つ SZ を傷づけ，他の当事者から疎遠にし，結果的に排除した.これらの序列を生む障害当事者の相互認識と規範意識が可視化されることは，社会における無/意識的な差別の明確化につながるだろう.

最後に，ナラティブ研究の観点から本稿の 2 つのデータともに出現した仮想のシナリオの機能について考察を行う.佐藤（2020）では，震災経験に関する語りに対する分析を通して，仮想のシナリオは語り手のアイデンティティを構築するスペースになりうることが例示されている.本稿でも，起きたかもしれない，またはまだ起きていない出来事を語ることを通して，語り手が自分の立ち位置を調整し，アイデンティティを示していることも確認できた.また，本稿の結果から，仮想のシナリオは語り手が他者に対しての認識，内面化された規範意識を映し出せるスペースとなる可能性を示しているのではないかと考えられる.

参考文献

アレクサンドラ・イエルガコポロ（2013）「ナラティブ分析」佐藤彰・秦かおり・岡本多香子訳，佐藤彰・秦かおり（編）『ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすのか』ひつじ書房，pp.1-42.

川岸洋美・市山加奈恵・中田伸代・筒口由美子（2002）「精神分裂病患者の入院体験から学ぶ看護：当事者の語りを通して」『富山医科薬科大学看護学会誌』Vol.4(2)，pp.137-147.

片岡三佳・野島良子・豊田久美子（2003）「精神分裂病者が語る入院体験：現象学的アプローチを用いて」『日本看護研究学会雑誌』Vol.26(5)、pp.31-44.

北村育子（2004）「病いの中に意味が創り出されていく過程：精神障害・当事者の語りを通して、構成要素とその構造を明らかにする」『日本精神保健看護学会誌』Vol.13(1)、pp.34-44.

佐藤彰（2020）「第 5 章 仮定の語りにおける語り手のアイデンティティ構築　震災経験をどう語るのか」秦かおり・村田和代（編）『ナラティブ研究の可能性』ひつじ書房, pp.99-122.

早野禎二（2016）「精神障害と社会 ―歴史社会学の視点から」『東海学園大学紀要』第 23 号、pp.29-53.

ロバート・F・マーフィー（2006）辻信一訳『ボディ・サイレント―病いと障害の人類学』、平凡社.

Bamberg, M. (1997). Positioning between structure and performance. Journal of Narrative and Life History, 7, pp.335-342.

Bamberg, M. (2004). “We are young, responsible and male”: Form and function of “slut-bashing” in the identity constructions in 15-year-old males. Human Development, 47, pp.331-353.

Davies, B. and Harré, R. (1990). Positioning: The discursive production of selves. Journal for the Theory of Social Behavior, 20, pp.43-63.

Georgakopoulou, Alexandra. (2001). Arguing about the future: On indirect disagreements in conversations. Journal of Pragmatics, 33, pp.1881-1990.

Schiffrin, Deborah. (1996). Narrative as self-portrait: Sociolinguistic construction of Identity. Language in Society, 25, pp.167-203.